
FAIRYTAIL ~二つの心を持つ者~

月の歌姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRYTAIL ～二つの心を持つ者～

【Nコード】

N7684Y

【作者名】

月の歌姫

【あらすじ】

FAIRYTAILのお話ですっ！！

ぜひ、読んで下さいね

#01「ジャンとの出会い」(前書き)

作者「先にいっておきます…ジャンはオリキャラです!」

ハッピー「なんで、それ言っの?」

作者「それが私だからさ!」

#01「ジャンとの出会い」

時は夕方、ある森の手前に馬車が止まっていた。

「お嬢ちゃん、起きてくれるかい？」

そう言つて、馬車の主は少女の体を揺さぶり、起こそうとする。
しかし、少女は起きそうにない。

（シーオン。おーきーなーよー）

それを見ていた赤い鬘たてがみを持つ幼竜が、腰まで届くアッシュブロンド灰金の髪の少女
シオン・クラウドイオに伝えると、やっとシオンは体を起こした。

「うゝ…もう着いたんですか…？」

シオンは眠そうに目を擦りながら主人に聞く。

「んゝ…着いたってワケじゃないんだけど…ここからは歩きでいつてほしいんだ…」

申し訳なさそうに主人が言った途端、少女の目つきが変わり、尋ねる。

「なにかあつたんですか？」

「うん…この先に人狼の盗賊がいてね…この辺りの村は、ほぼやられてるんだ。本来なら…お嬢ちゃんの目的地まで送り届けてやりた
いが…」

「その件で…泊まるはずの宿まで襲われた…ということですか？」

「ああ…。すまないなあ、お嬢ちゃん…」

馬車の主は申し訳なさそうに頭を下げた。

「別に構いませんよ。それに…無理言つて乗せてもらったのは私のほうですし…」

シオンがそう言うと、主人は頭をあげた。

「そうだったね…。私は戻らなきゃいけないが…」

「あ、大丈夫ですよ？私、それなりに強いので…」

（アレ…それなりってレベルじゃないよね？）

主人が心配そうにシオンを見ると、シオンは笑顔でそう答え、いつの間にかシオンの腕のなかにいたフリーはツッコんだ。

「なら…いいんだが…。それじゃあ…気をつけてね」

そう言つて、主人は元来た道に戻つて行つた。

＊＊

「…行つた…よね？」

「行つた…ね」

馬車が去つた後、シオンはフリーに尋ね、フリーはそれに答えた。

「…じゃ、ケロちゃん、バツボさん、もう出てきてもいいよ」

そうシオンが言った途端、シオンの腰に付いているポーチからは、羽根の生えたオレンジ色のヌイグルミが現れ、右腕のブレスレットが銀でできたケン玉（？）がになり、同時に言った。

「「ぶはあ！！！！シンドかった……」」

「息ピッタリだね〜ケン玉さんとケルベロスは……」

息ピッタリな二人（？）を見て、フリーが感想を述べる。

「ワシはケン玉ではない！バツボじゃ馬鹿者　　っ！！！！！！（激怒）」

「バツボ……頼むから大声出さんというてや！！！！耳、痛くなる……！」

ケン玉扱いされ怒鳴るバツボに、ケルベロスが注意する。

「……すまん、ケルベロス殿。つい怒鳴ってしまって……」

「わかってくれればええんや」

と、良い雰囲気なのにも関わらず、フリーが言う。

「やーい、ケン玉怒られた〜」

「「フリーのせいじゃろ／やろ……！！？」」

「ボクのせいじゃないもん」

その瞬間、辺りの温度が下がったように感じた。

三人（？）が後ろを振り向くと、恐ろしいほどの爽やかな笑顔のシオンがいた。

「フリー？ふざけるのも大概にしないと……私、怒るよ?。」

「「「スイマセン！！！！」（汗）」」

三人（？）の謝罪の声が響き渡った。

＊＊

その3時間後…、辺りは闇に包まれ始めた。

「すっかり暗くなっちゃたね…」

「ウム…もうすぐ夜になるな…」

「どうか、泊まれるところあるかなあ？」

「…うん…」

フリー・バツボ・ケルベロスの三人（？）が相談していると、

「…野宿になる…カナ…？」

と、遠い目でシオンが言う。

（（不味い！！））

こういう時のシオンは暴走する。

それを理解すると、三人（？）はすぐ行動を起こした。

「うんゴメン、シオン。お願いだから戻^{カムバックして}ってきて！！（泣」

「だ、大丈夫やて！絶対に泊まるところ見つかるて！！（汗」

「ウ、ウム…そうじゃぞ、シオン嬢！！希望を捨ててはならん！！」

「…わかってまーす…」

（（ぜ、絶対わかってない！！！！））

三人（？）が諦めかけたその時、

「キミ、どうかしたんスか？」

その声の主は、三人（？）にとっては救いの神だった。

＊＊

声をかけてきたのは、シオンより4つ年上の12歳の少年　ジャ
ンだった。

ジャンは跳ねた黒髪に黒目の少年だった。

ジャンは、この辺りで母親と二人で農作物を育て、それを食べたり・
売ったりで暮らしているらしい。

シオン達はジャンとそんな会話をしながら、彼の家に向かっていた。

「へえ！マグノリアへ行こうとしてたんスか…」

「はい…でも…「いいんスよ」…え？」

シオンが答える前にジャンは遮ると、続けた。

「わかってるんス…あいつらのことは………」

ジャンは、そう言って俯いたが、すぐ咳払いをし、伸びをした。

「さて！早く家に行こうっスー！！ウチの母ちゃん、怒るとメツチャ
怖いんスよ！だからほら！！」

「わっ!？」

ジャンはシオンの手を引っ張って、自分の家へと向かって行った。

シオンに見えないよう…涙を隠して…。

しかし…シオンはその涙に気付いていた…。

#01「ジャンとの出会い」(後書き)

作者「次回はナツとハッピーが登場する…かも？」

ナツ・ハッピー

「何故に疑問形!？」

#02「会話」

「いんやゝ食った、食ったあゝ」

「も、もう食べれんな…」

「おなかいっぱいだよゝ」

「…みんな、食べてすぐ寝ないで…。行儀悪いから…（汗）」

ジャンの家で夕飯を食べ終えた直後、横になった三人（？）に、シオンは注意した。

「別にいいっスよ。それよりシオン…汗、流してきた方がイイっスよ」

「えっ？いいんですか？」

「ええって、ええって 女の子は清潔第一なんやから」

そう言ったのはジャンの母・ジェーンだ。

ジェーンはジャンとは違い、ベージュの髪に黒目だったが、目は同じだった。

「じゃあ…呼ばれますね」

シオンは笑顔でそう言うと、風呂場に向かった。

「うゝ…気持ちいいゝ」

シオンは風呂…といってもドラム缶ぶるだったが、堪能していた。
そんな時、頭に男の声が響いた。

（…相変わらずガキだな…お前は…）

（あれ？シロンが話しかけてくるなんて…珍しいね？）

シオンは驚く様子もなく、心の中で相手の男性　シロンに言った。
といっても…シロンは人間ではない。

太古の昔、この世界を生きていた伝説の生物、レジェンズの一人だ。
今彼は、ソウルドールと呼ばれる水晶の中からテレバシー念話で、シオンに話しかけていた。

（俺が声かけちゃあいけねえのか？）

シロンはシオンの言葉にムツとしたようで、シオンは慌てて言い直した。

（ち、違う違う！

ダメって訳じゃなくて…ほら、テレバシー念話で会話するのって初めてだなあ
って…思っただけ…）

シロンは暫く経って、

（…言われてみりゃあ、そうだな…）

と言ったところを見ると、納得したようだ。
シオンは胸を撫で下ろしてため息をつく、再びシロンが尋ねてきた。

(で、お前は何悩んでんだよ？)

＊＊

シオン side .

ストライクゾーン
直球、まさにそれだった。

シオンは目を細め、雨除けの天井を見上げて言った。

(……なんでわかったの？)

(アホか。もう3年も一緒に行動してんだ…分かるに決まってんだろ？)

3年。

もう3年経つのか…あの牢獄から…あの人達に助け出されて…。
そして…シロン達の…力の制御者になって…3年…か…。

(シロンが気付いてるってことは…グリードー達も気付いているよね…)

(……俺ってそんなに信用度低いのか？)

(うーん…私の中だと……うん、低いね)

(……ズバツと言うな)

声音からして本当に傷ついているようだ…シオンは悪く思い、謝ろうとした…しかし

『 日頃の行いのせいじゃないのか？ 』

と、彼…もう一人の自分の声が響いた。

シオンは肌身離さず持ち歩いている紫色に輝く宝石が付いたペンダントを目線に上げた。

「……シンさん、今の言い方はないとおもつよ？」

突然した声に、シオンは注意した。

途端、もう一人の自分…否、もう一つの意識は鼻で笑い、言った。

『事実だろう？あの白き風を司る竜は理解力が乏しいからな…』

(…シオン、今シン…なんて言いやがった？)

今伝えたら不味い…というか噴火寸前のシロンに伝えてはいけない。シオンは直感でそう感じると、なにも言っていないと伝えたが…

(シオン…嘘はいけねえなあ？あのやろう…ぜってーなんか言った
だろ？)

噴火寸前のシロンに気圧され、白状した。

(…理解力が乏しいって言ってました…)

(……………おい、シン。後でツラかせや)

『ほう…自分の主人を傷つける気か？』

(あゝあゝ？テメエが売ったケンカだろうg…(いい加減にせぬか
！ウインドラゴン！！)

と、凜々しい女性の怒鳴り声と拳骨の音が響いた。

恐らく、シロンと同じレジエンスのガリオンが拳骨を喰らわせたのだらう。

(全く…大丈夫か？シオン)

（私は大丈夫だけど…シロンは？）

（問題ない。そんなことよりシン！！そなたはどうゆつつもりなのだ！？）

『フンツ…俺がどのようにしようと…俺の勝手だろう？』

シンのその言葉についてシオンがキレた。

（シンさん…それくらいにしてくれないかな…？）

その一言だけで十分だった。

シンも怒らせてはならないことを熟知しているので、すぐに引込んだ。

（ガリオン、シロンに言っておいて…シンさんの言葉にのるなって…）

（わかった…それより…早く出なくてよいのか？）

ガリオンのその言葉に、自分が風呂に入っていたのを思い出したシオンであった。

シオンは慌てて風呂から出ると、ジャン達がいる居間へと向かった。

＊＊

居間でシオンがジャンと話していた時だった。
音が聞こえた。

「！！！」

最初に気付いたのは、シオンだった。

「シオン、どうしたんスか？」

「しっ…何か妙な音が聞こえる…」

何かを齧る音と、噛み返す音、飲み下す音。
それらが外 畑の方から聞こえてきた。

「ヤツらがきたみたいっスね…」

そう言つてジャンは、席を立つた。

「およしよジャン！今度こそ殺されちまうよ！！」

「大丈夫っス！！母ちゃんシオンと隠れてるっス！！」

そう言つて扉を勢いよく開けると叫んだ。
そこにいるであろう者達に…

「い、いい加減にするっスこの怪物兄弟！！オイラン家の畑をこれ以上荒らすんなら…？」

しかし、そこにいたのはジャンの知っている者達ではなく…

「……ア、アンタ…誰っスか？」

桜色の髪に鱗模様のマフラーを身に着けた少年と翼を生やした青猫だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7684y/>

FAIRYTAIL ～二つの心を持つ者～

2011年11月29日17時50分発行